

いきいき山梨ねんりんピック2026

山梨県シルバー俳句大会 入選作品集



- ◆展示期間 令和8年6月5日（金）～6月7日（日）
- ◆会場 山梨県立図書館1階「イベントスペース」

社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

井上康明選

■特選■

葉ざくらのや風の蹴散らす日のひかり

南アルプス市 武井 志津子 八八歳

梅ほつほつ百年といふ樹の時間

葦崎市 山本 栄子 七三歳

春雪の消えて大地の膨らめる

富士吉田市 田辺 和代 八四歳

寝落つ子を背より下ろす春の月

北杜市 八代 菜美子 七八歳

夏草や顔映るまで鎌を研ぐ

甲斐市 乙黒 明雄 七七歳

■秀作■

この星のこの土好み福寿草

都留市 小笠原 直江 九二歳

夫逝きて十年といふ除夜の鐘

甲斐市 塚田 博美 八一歳

妹の眠る墓域の草青む

南アルプス市 河西 浩子 六四歳

産土の土柔かきふきのとう

甲斐市 井上 伊津子 八二歳

妣に似て長き爪なり春隣

葦崎市 河野 節子 七四歳

冬天やひるむことなく老いゆかむ

葦崎市 宮澤 繁子 七五歳

落椿黙して色の立ちにけり

笛吹市 渡邊 眞由美 七四歳

吊されしセーラー服や春待つ日

北杜市 大柴 優子 七六歳

水温む鍬に小石の当たる音

都留市 板津 松男 七七歳

鰐口の綱強く振る受験生

山梨市 的場 けさみ 七〇歳

【評】

冬から春、又初夏へと季節を豊かに描いた作品に感銘を受けました。大自然の推移に心を添わせその感動を喜びとともに詠っています。風や大地、樹木や花の姿に長い人生の歳月を思わせる心情が込められています。さり気ない暮らしの一場面が味わい深く詠まれ俳句の魅力が伝わります。

(特選句)

○一句目 桜の花が散って葉ざくらになった初夏の情景を光とともにたしかに捉えています。心地よい風も吹いているでしょう。

○二句目 百年の樹齢の梅の古木に花が咲き始めました。太く黒い幹に可憐な花が咲いて百年という歳月が浮かび上がります。

○三句目 山野に降った春の雪が消えて、土が見えています。小さな草がつつすらと芽吹き、大地は膨らんできました。春の息吹を思います。

○四句目 未だ一歳にならない赤子でしょう。ずっしり重くあたたかい赤子を背中からおろしほっと安堵しています。塗れるような春月の下。

○五句目 青々と夏草が茂っています。その夏草を刈るための鎌を研いでいるのでしよう。顔が映るほど鋭く研いだ鎌には、夏を越えようとする人の意志が感じられます。

保坂敏子選

■ 特選 ■

止みそうに止みそうに降る春の雪

富士吉田市 田辺和代 八四歳

冬天やひるむことなく老いゆかむ

葦崎市 宮澤繁子 七五歳

Tシャツは青空の匂い麦の秋

上野原市 榎本愛子 八六歳

郭公やこだま返さぬ山の墓

都留市 小笠原勇 九四歳

梅ほつほつ百年といふ樹の時間

葦崎市 山本栄子 七三歳

■ 秀作 ■

大川の土手渡りゆく揚雲雀

甲府市 村松幸治 七六歳

先ず眼鏡拭いて読み手となる二日

大月市 鈴木光子 九一歳

春ともし餓鬼を足下に四天王

富士吉田市 勝俣茂 六六歳

妹の眠る墓域の草青む

南アルプス市 河西浩子 六四歳

百舌鳥猛る訪う人の無き生家かな

中央市 小林武子 八〇歳

如月や鳥語溢れる雑木山

北杜市 小山崇 八二歳

春浅し抜け道にある釣瓶井戸

甲府市 糠信 富貴子 八八歳

夏草や顔映るまで鎌を研ぐ

甲斐市 乙黒明雄 七七歳

思惟仏の十指に宿る余寒かな

都留市 小林ひろみ 七五歳

待つことのあるたのしさや木の芽ふく

南アルプス市 井上光子 九〇歳

【評】

作品を拝読していると作者が日々をどのように過ごしているのかが見えてきます。デイサービスに通ったり、医者にかかったり、いきいきサロンに集ったり、孫と遊んだりとさまざまな顔をもった作品に出会うからです。また、世界の各地の戦禍を憂う作品や災害に心を痛めた俳句も多くありました。おのれの年齢を軸にして今を見つめているその精神力に感服しながら選をさせていただきました。俳句が少しでも日々の糧になり、俳句のある生活が楽しいと思えることを祈っています。

(特選句)

○一句目 降る端から消えてゆく淡雪ともいわれる春の雪。そんな春の雪を端的に示し「止みそうに止みそうに」のリフレインによってやさしく、また淋しく語りかけた诗情あふれる作品です。

○二句目 どんよりとした雪催いの空や晴れ上がった身を切るような青空。冬の空は寒さを軸にしてさまざまな貌を見せます。冬を見上げる作者のきつぱりとした精神性が見事に詠われ共感を呼びます。

○三句目 黄熟した麦が波立つ風景はどこかノスタルジック。「Tシャツは青空の匂い」と捉えた作者の健康な詩精神に驚きます。麦秋の風光を鮮やかに見せた作品です。

○四句目 山の畑に隣り合っている墓所でしょうか。畑仕事の帰りに野の花を手折っていつも寄っているのです。「墓」を詠みながら明るい印象を受けるのは歯切れのいいカッコウの声の恩恵に違いありません。

○五句目 樹齢百年という老梅に今年も花がほつほつと咲き出しました。真つ先に春を告げる白梅の香りのなかで、しみじみと百年という時の重さを感じています。だから美しいのだ。

長田群青選

■特選■

青空が吸い上げることどんどの火

甲斐市 小澤史子 八八歳

Tシャツは青空の匂い麦の秋

上野原市 榎本愛子 八六歳

風花や手造り味噌は黄金色

北杜市 道村典子 七四歳

移住者の若きらもゐてどんどの火

南部町 渡邊公子 八五歳

大富士の裾まで晴れて暁替

都留市 勝俣静子 七七歳

■秀作■

風鈴の音振り分けて馬籠宿

甲州市 秋野正彰 八四歳

採血のホルダー光る冬の朝

甲府市 嶋田章三 八八歳

穂芒の乱れしままに美しき

富士吉田市 権正年 九八歳

春の水讃歌となりて谿を出づ

北杜市 小山崇 八二歳

春きざす万年筆の軸太し

葦崎市 宮崎眞弓 七二歳

知恵の輪のするりと解けて春の風

笛吹市 石倉正明 七五歳

つくしんぼ谷の湧水にごりなく

葦崎市 白倉みはる 七六歳

初蝶のなにも触れずに去りにけり

富士吉田市 渡辺武人 八二歳

難聴のはがゆさにいて春寒し

大月市 鈴木光子 九一歳

春うらら動物園へ麒麟見に

大月市 真道朱實 八二歳

【評】

俳句の材料は特別な場面ではなく、ふとした日常の中に転がっている、アンテナを高く張ってつかまえてもらいたいと思います。今年の作品の中に「移住者」といった現代的な社会現象を詠んだ句があり、一つの挑戦として好感を持ってました。年齢を重ねてはじめて見えるものがあります。

(特選句)

○一句目 「どんど焼き」には夜と昼があるが、この句は昼のどんど焼き。寒中の澄み切った青空が炎を真つ直ぐ吸い上げるようだと捉えた。力の溢れる一句。

○二句目 日常のファッションにすっかり定着した「Tシャツ」。口に出すと心地よい風が吹くようだ。「青空の匂い」とは言い得て妙。「麦の秋」には懐かしさも籠もる。

○三句目 「味噌作り」も冬の季語だが、こは「風花」が主の季語。近隣の人と一緒に、昔ながらのやり方で作り上げた味噌は、輝くような黄金色。チラチラと舞う風花も喜んでるよう。

○四句目 都会から移住して来た若い夫婦がいる。ようやく馴染んできた見え、今日は小正月のどんど焼きに来ている。このまま住み着いてもらいたいものだ。期待を込めながら、火に手をかざす。

○五句目 「豊替」は、年の暮に置を新しいものに替えて新年を迎える用意をする。青々とした蘭草(いぐさ)の匂いが清々しい。富士山も頂から裾野まで晴れ渡り、豊替を祝福する。

■ 佳作 ■

去年今年不戦の誓い新たにす

都留市 松沢節子 七九歳

金柑の揺れてはるかな四方の山

市川三郷町 山口佳代子 七六歳

三代の集ふ座敷や水温む

笛吹市 辻本美代子 七二歳

介護車の行き交ふ村や浮寝鳥

富士吉田市 舟久保安子 七三歳

つややかな葉に紅立つや寒椿

都留市 渡辺君代 八一歳

からからと落葉転がす風の音

上野原市 臼井ひろ子 九五歳

芍薬の芽の赤々と風の中

南アルプス市 小松美子 七七歳

日脚伸ぶゆっくりふくむ予後の白湯

韮崎市 樋口英子 六九歳

春浅し別れを告げるクラクション

富士吉田市 宮下節子 八二歳

父と子の声の弾むや春の風

富士吉田市 小林祥子 八三歳

小春空友の御霊の昇りゆく

富士吉田市 堀内悟 六五歳

限りなき我生命かな冬の星

甲州市 浅川誠 七二歳

襟元のスカート揺れて春の風

甲府市 星はるみ 六六歳

吹き抜ける炎暑の坂の向かひ風

富士河口湖町 渡邊雅子 六七歳

柿挽いで空を寂びしくして昏るる

笛吹市 鈴木ふみよ 九一歳

ちちろ鳴く静けさ破る宵の闇

甲府市 野村直高 七六歳

日暮れまで終えたき仕事花曇り

北杜市 松林新一 九五歳

草に寝て戯ふ夜風や遠花火

甲斐市 高橋正 九〇歳

高台の幟きらりと風を見る

山梨市 永田百合子 七二歳

しぐれ雲香の流るる妻の墓

甲府市 吉野正男 八三歳

おぼろ雲人恋う手紙書きにけり

甲府市 吉野正男 八三歳

時告げる菩提寺の鐘石路の花

大月市 小林久子 八五歳

遠き日の父の句集や春ともし

韮崎市 山村満代 九三歳

寒九の水にて漢方薬飲み干せり	南アルプス市	小松重和	八九歳
小気味よき母の運針小春の日	西桂町	高尾正和	七十二歳
輪になりて笑いはじける青葉道	山梨市	樋口弘昭	六二歳
ふるさとは思い出すもの鼓草	笛吹市	赤尾和子	八三歳
廃寺の大樹となりぬ糸桜	富士河口湖町	堀内ミツエ	七九歳
発掘の遺跡横たふおぼろ月	甲府市	功刀佳秋	七一歳
外出の許可に連れ添ふ朝桜	都留市	伊藤佐代子	七五歳
上棟の木の香の匂い小六月	甲府市	宮川東	八八歳
晴天や鳥の啄む花八つ手	都留市	大澤茂子	八一歳
健やかに重ねし歳や初御空	富士吉田市	加々美恵子	七十二歳
空っ風押す引く山車や秩父の夜	甲府市	大森和男	八一歳
城跡の冬青空や鳶一羽	中央市	生井美知子	七八歳

鳳凰のごとき農鳥富士立夏	富士吉田市	舟久保安子	七三歳
巡り来る母の忌日や梅月夜	都留市	渡辺孝行	八六歳
店先のまねき猫の目冬うらら	西桂町	梶原とき子	八五歳
あやとりの絡まる糸の四温かな	笛吹市	渡邊眞由美	七四歳
嬰兒を神の如抱き初湯かな	富士吉田市	鈴木文代	七三歳
水嵩の増して小川の草つらら	山梨市	杉原万利江	七八歳
野水仙一輪供ふ六地藏	富士吉田市	渡辺久美子	七七歳
煌々と深夜の塾や梅二月	富士吉田市	小林進	六七歳
陽を溜めて果樹園眠る山眠る	大月市	小林勝子	八二歳
笠立に杖忘れあり春うらら	富士河口湖町	流石絹代	九〇歳

※「年齢」は令和八年六月五日現在です。
 (山梨県シルバー俳句大会展示初日)

